

HOKUSEI GAKUEN UNIVERSITY
COMMUNICATION MAGAZINE AUTUMN EDITION

北星学園大学

北星学園大学短期大学部



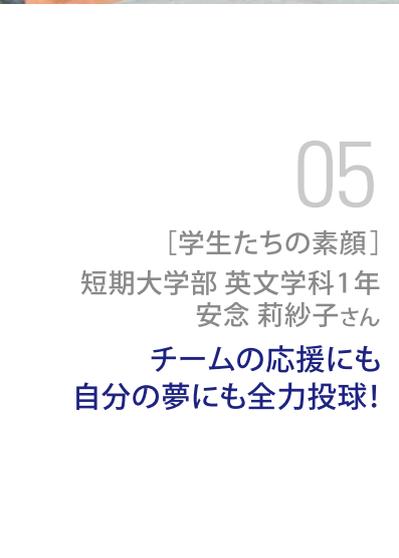
02-03

【特集】
共働学舎新得農場 代表
宮嶋 望さんインタビュー
社会で居場所を失った人々が、
社会に必要なヒントをくれる。



04

【つながり】
元交換留学生ラフェイさんと
北星学園
日本の近代化に力を
尽くした学者を研究する。
伝えるのは、学びの精神。



05

【学生たちの素顔】
短期大学部 英文学科1年
安念 莉紗子さん
チームの応援にも
自分の夢にも全力投球!



06

【OB&OG インタビュー】
卒業生は、いま。
UHB「スーパーニュースU」
キャスター 新崎 真倫さん
現場の空気を大切に、
視聴者の心に届く報道を。



07

【先生たちのその素顔】
経済学部 経営情報学科
松本 康一郎先生
グローバルな視点で読み解く
日本のゆくえ、企業の未来。



08

【HOKUSEI INFORMATION】
北星学園大学からのお知らせ

- ★子どもたちが安心して学べる
環境を目指して
道教委と本学が連携協定を締結
- ★札幌市交通局 × 北星学園大学
「地下鉄活性化プロジェクト」
活動中!



[特集] INTERVIEW

共働学舎新得農場 代表 宮嶋 望さんインタビュー

社会で居場所を失った人々が、社会に必要なヒントをくれる。

社会で居場所を失った人々がともに働き、ともに暮らす共働学舎新得農場。代表を務める宮嶋望さんは彼らを「メッセンジャー」と表現します。次の世の中を生きやすくするために彼らが届けてくれるメッセージとは？そして、共働学舎が志す農業や生産のあり方から見えてくる日本の食の未来とは？福祉を学ぶ2人の学生がお話を伺いました。

聖書の教えのもと、小さな声に耳を傾ける

三條：私たち北星学園大学の学生はキリスト教に基づいた教育を受けていますが、共働学舎の方針も聖書の教えをベースとしていると伺いました。

宮嶋：共働学舎はクリスチャンだった私の父が1974年に設立し、現在全国5カ所にあります。その基本構想は聖書の言葉「神は、神を愛する者たち、すなわちご計画に従って召された者たちと共に働き、万事を益となるようにして下さることを私たちは知っている」から生まれました。ここ新得農場でも朝食の前に聖書を読み、夕食後に讃美歌を歌い、日曜礼拝も行っています。メンバーの信仰は自由ですが、聖書を心のよりどころとしている人が少なくありません。



小林：共働学舎では、社会的に弱い立場の人々が自立の道を探りながら仕事や生活をともにしているそうですね。

宮嶋：社会的弱者と言われるのは、社会のシステムの中で生きるのが難しい人々だと思います。今の日本では、障がいのある人やさまざまな事情を抱えた人にアプローチするしきみはほぼ整備されているものの、そこにもなじみず、傷ついたり落ち込んだり、自暴自棄になって共働学舎にやってくる人たちがいます。そんな人々の、ともすれば消えてしまいそうな小さな声に耳を傾ける姿勢を私たちは大切にしてきました。なぜなら彼らはメッセンジャー——現存する社会のしきみでは解決できない問題があることを私たちに教え、解決のヒントを与えてくれる存在だからです。人間の体は弱い部分を大切にすることで全身の均整が取れるものですが、人間社会も同じこと。社会的に弱い存在に目を向けることが社会全体の調和につながると私は考えています。ここにも「主の力は弱い所に完全に顕われる」という聖書の言葉が息づいています。

人としての学びを世の中に還元する

三條：私たちは大学で福祉を学んでいますが、共働学舎の活動は福祉に通じるものがあるように感じます。宮嶋さんがメンバーと信頼関係を築く上で大切にしていることは何ですか？

宮嶋：ありのままを認めることです。共働学舎にはルールもないし、仕事を課すこともなく、どう過ごすかは自由です。でも自然に一人ひとりの役割が生まれ、自らの意思で働くようになっていきます。ここでは牛の世話や農作業、チーズ作り、工芸、販売などたくさんの仕事がありますから、その中から自分がしたいこと、自分にできることをゆっくり見つけていけばいいのです。生産を担う人が共働学舎の運営を支え、障がいなどで働けない人は食事作りや掃除などでメンバーの生活を支え、共働学舎で得た経験と自信が彼ら自身の将来を支えていく。そうして彼らが自分の居場所を見つけ、自立していく姿は、彼らが居場所を見つけられなかった現代社会に対して、次の世の中をつくる上で必要なヒントを与えてくれるのです。共働学舎はお金を還元することはできないけれど、社会的弱者＝庇護される存在ではなく、社会とギブアンドテイクの対等な関係なのだという学びを世の中に還元している点において、大きな意味があると自負しています。





PROFILE

みやま のぞむ
宮嶋 望
 共働学舎新得農場代表・
 NPO 法人「共働学舎」副理事長

1951年 前橋市生まれ東京育ち、自由学園最学部卒。アメリカ・ウィスコンシン大学畜産学部卒業（農学士）。1978年 共働学舎新得農場を開設。1998年「第1回オールジャパンナチュラルチーズコンテスト」最高賞受賞。2004年「第3回山のチーズオリンピック」(スイス)金賞とグランプリをはじめ、世界各国のチーズコンテストで多数受賞。



こばやし なお
小林 捺央さん
 社会福祉学部 福祉計画学科 4年
 大麻高等学校出身

「弱者は社会のメッセンジャー」「ルールがなくても役割分担が生まれて自分の居場所を見つけていく」という言葉が印象的でした。私は高齢・過疎化を見据えた地域づくりを研究していますが、「生きやすい社会」を追求する宮嶋さんの姿勢からヒントをいただいたように思います。



さんじょう ゆきな
三條 友季那さん
 社会福祉学部 福祉臨床学科 4年
 大麻高等学校出身

障害者総合支援法を研究しています。規律の中で自立を目指す福祉施設が多い中、自分の生き方を自分で決めるという共働学舎の方針はとても新鮮で、違った角度から福祉のあり方を考えるきっかけになりました。



『いらない人間なんていない
 —世界一のチーズを作った農場物語—』宮嶋望
 (いのちのことば社 フォレストブックス / 2014年7月刊行)
 社会から疎外された人々が共働学舎・新得農場で希望を見だし、チーズ作りに懸ける姿を通して閉塞感に満ちた社会へ伝えるメッセージ。宮嶋さんの最新著。

生きるためのチーズ作りで、ヨーロッパの頂点に

三條: 先ほどチーズ工房を見学させていただきました。メンバーのみなさんの丁寧な仕事ぶりや長い熟成期間を要するチーズは、大量生産やファストフードとは真逆のモノづくりだと感じました。

宮嶋: 共働学舎のチーズ作りは、寄付に頼らず自分たちで生きていける手段を得るためにスタートしました。牛の世話から搾乳、チーズの製造、販売まですべて自分たちで行うため、品質や安全性には自信があるけれど、時間もコストもかかり、なかなか売れなかったのです。でも2004年にヨーロッパのチーズコンテストでグランプリを受賞。「ヨーロッパのコピーではない日本のチーズが来た」と評価され、うれしかったですね。これを機に国内でも知名度が上がり、2010年の口蹄疫、2011年の東日本大震災などの厳しい時期も乗り越え、昨年は過去最高の売上げを記録しました。共働学舎のメンバーはみんなスローペース。そんな彼らが気持ちを揃えると、時間がゆっくり流れていきます。だから時間も手間もかかるチーズ作りが合っているんですね。

食の未来のために、共働学舎が還元できること

小林: いま日本ではTPPによる食糧自給率への影響や輸入食品の安全性などが取り沙汰されていますが、この状況をどうお考えですか？

宮嶋: 私はアメリカ留学中に酪農を学んだ際、米国の大規模農業を目の当たりにし、日本は競争相手にすらならないと思いました。しかしアメリカが大量

生産を基本とする農畜産業を国際政治上の戦略と位置づけ、飼料用穀物の大量輸出によって世界の食糧市場を掌握しようとしていると知り、アメリカの真似ではない農畜産業を日本で確立しようと決心したのです。新得町から無償で提供していただいた牧草地を開墾し、4年目から有機農業に転換。土地で穫れたもので動物を育てて生産する「土地に根ざした農業」を目指してきました。そうやって作り上げたチーズが「価格」ではなく「価値」で認められた経験から、品質やおいしさを評価基準とするマーケットこそが日本の食の未来のカギになると思うのです。北海道には120もの小さなチーズ工房がありますが、味も品質もバラバラ。そこで品質管理技術や生産技術、商品供給力の底上げをはかるために「北海道高品質チーズ生産者標準」という組織を発足。有志の生産者による共通ブランド「ホッカイドウチーズ」を試作しています。共働学舎の人々が生きる場を提供してくれた十勝で、北海道のチーズを世界に誇れるブランドに育てるお手伝いをする——これもまた、次の世の中のために共働学舎が還元できることのひとつではないかと思っています。

小林・三條: 本日はありがとうございました。





日本の近代化に力を尽くした学者を研究する。 伝えるのは、学びの精神。

25年前、祖国アメリカを離れ、交換留学生として本学に在籍したミシェル・ラフェイさん。異国の地で学んだ留学生時代の思い出、留学後から現在も続く、北海道と日本の近代化に尽力した学者たちの研究について、その思いを伺いました。



北海道大学 大学院文学研究科・文学部 特任准教授
ミシェル・ラフェイさん
(Michelle La Fay)

1967年アメリカ合衆国アイダホ州生まれ。1989年交換留学生として本学に在籍。一時帰国後、1993年北海道大学研究生として再来日。内村鑑三に関する研究を始める。1997年北海道大学大学院文学研究科文学修士取得。2003年文学博士取得(北大で宗教学課程博士第一号)。2007年白樺学園高等学校(帯広)外国人講師。2008年北海道教育大学札幌校外国人教師。2011年北海道教育大学旭川校准教授。2014年北海道大学大学院文学研究科・文学部特任准教授。

留学で学んだ日本語はゼロからのスタート

アメリカのマクファーソン大学で宗教学を専攻していたラフェイさんは、1989年に北星学園大学の交換留学生として来日し、10カ月間、本学で学びました。当初は、日本語で「おはよう」しか話せなかったラフェイさん。留学カリキュラムは、ほとんどが「日本語」の授業でした。「発音はそう難しくはありませんが、問題は読み書きができないこと。漢字を覚えるまでが大変でした」。日本語に苦勞するラフェイさんを支えたのは、4人の先生と日本人の学生。学食などで語り合った当時の友人とは、いまでも親交が続いているといいます。「留学すると自分の国を違う視点から見ることができ、自分がアメリカ人だという意識を持つようになりました」。自分の国を離れて学ぶ経験は貴重で、機会があれば学生は留学するべきと、ラフェイさんは考えます。

内村鑑三に会い、学びの精神を研究する

10カ月間の本学での留学を終えたラフェイさんは、一度帰国した後、1993年に北海道大学に研究生として再来日。そこで担当教授から出された研究テーマは、札幌農学校の二期生、内村鑑三でした。「そもそも日本語は難しいのに、内村の本は明治時代の言葉で書かれているため、とても苦勞しました。いまでは、現代語よりその時代の言葉の方が読めるんですよ」とラフェイさん。内村鑑三に関する研究は約10年間続き、2011年には著書『なまら内村鑑三なわたし—二つの文化のはざままで』を発表しました。「内村はとても英語が堪能で、アメリカへ渡りさまざまな勉強をした人。多様な物事を学び、情熱的に意見したり行動したりする。彼の間人臭さに惹かれますね」。現在、北海道大学で特任准教授を務めるラフェイさんは、内村鑑三の盟友・新渡戸稲造の研究を続けています。また、同大学院文学研究科・文学部の国際交流室も担当し、国際人育成の特別プログラム「新渡戸カレッジ」にも関わっています。

北星の歴史に関わる、学者たちの志を探究

「現在、新しい本の執筆を考えています。書いてみたいテーマはいろいろありますが、いま関わっている新渡戸稲造やその親友である宮部金吾の研究もそのひとつ。内村と新渡戸は宮部を学者として、さらにその温和な人間性も信頼していました。3人の長い友情関係を深く考え、彼らがお互いにどのように支え合い、影響し合ったのか、とても興味があります。内村、新渡戸と同様に彼の研究を深め、さらに北海道や札幌農学校の歴史を研究していきたい」と今後のビジョンを語るラフェイさん。奇しくも、北星学園の基礎確立の時代に新渡戸稲造や宮部金吾も協力し、「北星」の名を決定する際に新渡戸稲造が関わったといわれています。ラフェイさんの研究は、本学の歴史にも関わるもの。キリスト教の精神を受け継ぎ、日本の近代化に尽くした偉大な学者たちの生き様を現代に伝えます。



1990年、本学に交換留学中だったラフェイさん(前列中央)。右隣は当時の山崎学長。



『なまら内村鑑三なわたし—二つの文化のはざままで』(柏艸舎・2011年/単著)

チームの応援にも 自分の夢にも全力投球！

北海道日本ハムファイターズのゲームに花を添える「ファイターズガール」として今季デビューを果たした安念莉紗子さん。ダンス経験のない不利を努力で乗り越え、チームの応援を笑顔で盛り上げるとともに、海外で働く夢をかなえるために、好きな英語の勉強にも全力投球の毎日です。



短期大学部 英文学科1年
安念 莉紗子さん
北星学園大学附属高等学校出身

ダンス未経験ながらオーディションに合格！

高校3年の時、札幌ドームでビール販売のアルバイト中にファイターズガールを間近に見て、その可愛さに一目惚れ。受験が終わった冬、オーディションに応募しました。ダンスは未経験でしたが、アルバイトで培った笑顔で審査を突破。合格からオープン戦までの1カ月はハードな練習で貧血を起こして倒れたり、正確なポジションを取れず指導を受けたりと苦労の連続でした。初めて大勢のお客様の前で踊った開幕戦は、不安と緊張のあまり気がついたら終わっていたという感じ。今でも本番前はドキドキですが、アルバイト時代からお客様と話すのが好きだったので、グラウンド開放や地方キャラバンでファンのみなさんと交流できるのがいつも楽しみです。



持ち味は小さな気配りと、とびきりの笑顔

ファイターズガールの活動を通して学んだことはたくさんあります。先輩やスタッフの方々など目上の人への接し方、見られる立場を意識した身だしなみやマナー、つねに先を考えて行動することなど。最初の頃は周囲に目を配る余裕もなかったのですが、小さな気配りでみんなが気持ちよく活動することも実感しました。経験が乏しい私はダンスやMCなどの目立つ特技がなく気後れすることも多いのですが、メンバーのユニフォームの準備やゴミの回収など、見えないところでの気配りと、とびきりの笑顔を大切にしていきたいと思っています。



海外で働く夢に向かって英語を勉強中

短大ではオーラルイングリッシュのクラスで英会話を中心に学んでいます。将来は海外で働きたいと思っているので、英語圏で自由にコミュニケーションできる語学力を習得することが当面の目標です。授業の一環で、海外で日本語教師やライターとして活躍している卒業生の方々の講演を聞き、ますますモチベーションが上がりました。秋には香港でのインターシップに参加予定。現地のホテルや空港などでの職業体験を通して、生きたビジネス英語にふれられるのが楽しみです。帰国する頃には、今シーズンのプロ野球もいよいよ大詰め。ファイターズの優勝を願って全力で応援しますので、みなさんもぜひ札幌ドームへ足を運んでくださいね！

OB & OG Interview

卒業生は、いま。

現場の空気を大切に、 視聴者の心に届く報道を。

今春からUHB「スーパーニュースU」のキャスターを務める新崎真倫さん。
一度は諦めかけた夢をかなえてテレビカメラに向かう新崎さんの、
アナウンサーという仕事に懸ける思いを伺いました。



しんざき まりん
新崎 真倫さん

帯広市出身。北星学園大学文学部英文学科を2007年3月卒業。TBSラジオを経てUHBと番組契約。「のりゆきのトークDE北海道」情報コーナー担当、「早おき! てれび めざまし北海道」アシスタントなどを経て「スーパーニュース」現場リポーターとして活躍。2014年春から「スーパーニュースU」キャスターを務めている。

諦めかけたアナウンサーの夢に挑戦

小学生の頃、テレビで見た八木亜希子アナウンサーに一目惚れ。女性らしさをたたえながらも優れた情報伝達力で視聴者を引きつける姿に憧れてアナウンサーを夢みるようになりました。しかし採用倍率1000倍以上という厳しい現実を知り、大学に入学する頃には諦めモードに。学生時代はサークルの仲間や信頼できる先生に恵まれて充実していましたが、就活の時期になって「夢に挑戦しないまま終わりたい」という思いが湧き上がり、全国各地のアナウンサー試験に挑戦。TBSラジオの情報キャスターに採用されました。

現場で生まれる自分の思いを大切に

首都圏の放送業界を体感し、一流の人々に学んだ3年間の経験は大きな収穫でした。でもやはりテレビアナウンサーの夢を捨てきれず、UHBの番組契約を経て「スーパーニュース」リポーターに。現場取材を通して思ったのは、アナウンサーは「話す」以上に「聞く」ことが大切だということ。見たままの事実を話すだけでなく、そこに関わる人々からいかに多くの情報を引き出すか、そこから生まれた自分の思いをどん

な言葉に託して伝えるか。視聴者の方の心に届くか否かはそこで決まります。キャスターとなった今はスタジオから伝える立場なので、現場に行けない分、スタッフとのコミュニケーションを密にし、取材内容を掘り下げて自分のものにしなければなりません。休日には事件現場に赴いてみたり、プロ野球やサッカーの試合を観に行ったり、少しでも現場の空気を吸収するよう努めています。たとえ放映されなくても、自ら体験したことはすべてキャスターとしての糧になると考えています。

自分らしく、視聴者に寄り添う報道を

「スーパーニュースU」キャスターになって数カ月。スタジオ経験も浅い上、まだまだ勉強不足なところもありますが、視聴者の方に寄り添えるコメントを心がけ、少しでもニュースを身近に感じてもらいたと思います。そしていつか「新崎といえどこれ!」と言っていただける分野を確立したいですね。番組をすべて録画してくれている両親や応援してくれる友人たち、そして勉強や就活で挫折しそうになるたび「目の前のことにこだわらず、その先の広い世界に目を向けてごらん」と励ましてくださったゼミの吉田一彦先生に、少しずつ成長していく姿を、テレビを通してお見せできたらいいなと思っています。



TBSラジオ時代、毒蝮三太夫さんの番組アシスタントも務めていました。



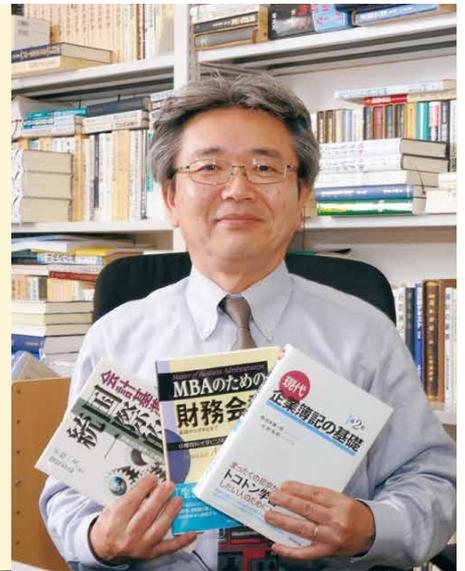
災害取材中に地元の方からねぎらいの言葉をいただき、人の温かさをおかみしたことも。

Featured Faculty Member

先生たちのその素顔

●経済学部 経営情報学科 松本 康一郎先生●

グローバルな視点で読み解く
日本のゆくえ、企業の未来。



PROFILE

まつもと こういちろう
松本 康一郎

1954年生まれ大阪出身。1982年神戸商科大学大学院経営学研究科博士課程修了。1982年に小樽商科大学商学部講師に着任、同大学教授・同大学大学院教授を経て2007年より本学教授。現在、経済学部経営情報学科長。

〈主な著書〉

- 『IMBAのための財務会計(三訂版)ー基礎からIFRSまでー』(同文館出版・2014年/共著)
- 『現代企業簿記の基礎 第2版』(同文館出版・2013年/共著)
- 『会計基準の国際的統一ー国際会計基準への各国の対応ー』(中央経済社・2005年/共著)



企業会計のグローバル・スタンダード「IFRS」

国際会計は日本では比較的新しい研究分野です。私自身も大学院までドイツの会計理論(Bilanz Theorie)を学び、1982年に小樽商科大学に赴任してから国際会計に関する研究を始めました。グローバル社会といわれて久しい昨今ですが、グローバル・スタンダードとしての会計基準の歴史は1970年代まで遡ります。現在は、民間組織としての国際会計基準審議会が、国際財務報告基準(IFRS: International Financial Reporting Standards)を作成・公表しています。欧州連合(EU)では、EU域内の上場企業(約8,000社)に対して、2005年1月以降開始する事業年度において、連結財務諸表の作成基準として採用が義務づけられ、現在では120を超える国と地域がIFRSを導入しています。日本では、2010年に初めてIFRSにもとづく連結財務諸表が提出され、2015年には50社を超える上場企業がIFRS導入に踏み切ると予想されています。

IFRSで日本の株式市場が変わる?

現在、東京証券取引所の一部上場企業に対する年間売買額の6割は外国人投資家によるものです。したがって、日本の株式市場を動かしているのは外国人投資家であると言っても過言ではありません。彼らにとってスタンダードなIFRSを導入する企業が増えれば日本株の売買への影響が予想されますし、株式市場の変化は企業経営にも影響し私たちの暮らしにも関わってきます。国際会計の動きを知ることで、これからの日本がどう進んでいくか、その動きは私たちにどんな変化をもたらすのかが見えてきます。私の4年ゼミでは、実際の企業の財務分析を行っています。競合他社との比較によって強みと弱みを分析し、弱みを克服し強みをより強くするためのビジネスモデルを考えるのが最終的な目標です。会計士や税理士の資格に必要な知識を大学4年間ですべて修得するのは難しいですが、財務諸表を読むことができれば、一般企業でも力を発揮することが可能です。学生の皆さんには、どのような企業でも通用するグローバルかつ実践的な財務分析力を身につけてほしいと思っています。

時事問題を斬るラジオコメンテーターとしても活躍中

10年ほどHBCラジオ「夕刊おがわ」で時事問題のコメンテーターを務めています。最近は年金などの社会保障問題と財政を絡めた話題が目立ち、時代を感じます。生放送なのでつい言葉が過ぎて後悔し(言った言葉に消しゴムなし)、放送を聞いていた知人から、口癖や話し方をチェックされることもあります。「ええー」が多い、大阪弁になつて、難しいと思われがちな経済に関する話題を少しでもわかりやすく伝えられればと思い、ほぼ毎週月曜日マイクに向かっていきます。



趣味のアルト・サクソを鳴らせばストレスも吹き飛ぶ。好きなプレーヤーは、奥野義典、土岐英史だそうです。



HBCラジオ「夕刊おがわ」月曜コメンテーターとして軽妙なトークを披露しています。



TOPICS

子どもたちが安心して学べる環境を目指して 道教委と本学が連携協定を締結

3月28日、本学と北海道教育委員会(道教委)は、いじめや不登校の未然防止、早期対処に向けた環境づくりのための連携協定を締結しました。これは4月の「北海道いじめの防止等に関する条例」施行に関連した初の取り組みです。

本学は道内で唯一、学生を対象にスクールソーシャルワーカー(SSW)資格取得講座を開設している大学です。SSWは、いじめや不登校の解決に向けて家庭と学校、関係機関のつなぎ役となる福祉の専門家。今回の協定によって本学は、現役教員にもSSW養成講座受講の門戸をひらくほか、SSWを目指す学生が道内各地で活動するSSWのもとで実習できる体制を整備するなど、教育の現場で子どもたちが抱える問題にアプローチできる人材の育成と確保に取り組んでいきます。



握手を交わす道教委の立川宏教育長(左から2人目)と本学の田村信一学長(同3人目)。

TOPICS

札幌市交通局 × 北星学園大学 「地下鉄活性化プロジェクト」活動中!

この夏、本学と札幌市交通局のコラボ企画「地下鉄活性化プロジェクト」が始動しました。この企画は、通学などで地下鉄を利用する学生のアイデアを活かして地下鉄の新たな価値創造を目指すものです。札幌市交通局の要請を受けて本学経済学部・大原昌明教授が窓口となり、7月8日のキックオフ・ミーティングには文学部・経済学部・社会福祉学部の1～4年生29人が参加。プロジェクトに関する説明を受けました。

8月28日、2回目のミーティングには16人の学生が参加。市電・地下鉄教習所、大谷地駅事務室および駅構内、東車両基地を見学し、シミュレーターを使った車両操作なども体験しました。普段は入ることができない施設を見学し、利用者の立場とは異なる視点から地下鉄を見た経験は、学生たちにとってさまざまな発見につながったようです。次回ミーティングでは地下鉄活性化のアイデアを出し合う予定(10～11月)。若い感性が札幌の地下鉄をどう変えていくのか、ご期待ください。



キックオフ・ミーティングでオリエンテーションを受ける学生たち。



普段見ることのない車両基地の様子に学生たちは興味津々。